

女真文字談義 (6)

—『寧古塔紀略』の満州語口語、無圈点及び有圈点満州文字など—

吉池孝一

解説が必要な東アジアの“文字と言語”に関心を持つ学生と教員の対話です。登場人物の設定は次のとおり。

佐藤久美^{きとうくみ}：学生。歴史一般に関心がある。

山村健一^{やまむらけんいち}：学生。入門段階のいろいろな言葉の学習を趣味としている。

安井教授^{やすい}：漢文の教員。いろいろな文字に関心がある。学生とともに金朝の言葉と文字の勉強をはじめた。

〈第6回目〉

山村健一：第5回目では、現代満州語口語^{まんとしゅうご}の文献を幾つかみしました。それで、破裂音と破擦音^{はれつおん}の二項対立子音^{はきつおん}の主要な区別は気音の有無にあり、音韻観念としては、{p}と{p^h}、{t}と{t^h}、{k}と{k^h}、{q}と{q^h}、{ʧ}と{ʧ^h}、{tɕ}と{tɕ^h}としておけば“大過は無い”ということでした。

安井教授：もともと、{k}{k^h}と{q}{q^h}、{ʧ}{ʧ^h}と{tɕ}{tɕ^h}は、体系を考慮した音韻的解釈を参考にして、それぞれ一つにまとめることができるかもしれませんがね。

佐藤久美：摩擦音sの音質についても話題になりましたね。モンゴル語のハルハ方言や満州語の或る方言の摩擦音には[s^h]と[s]がありました。この二つは、同じ位置で対立することはなく、単語の意味の区別には関わりません。ですから、音韻を/s/、音声を[s^h]～[s]とすることができます。

そうしますと、“発音運動の理想、発音運動の意図”としての音韻観念はどうなるのでしょうか。

山村健一：アクセントが有る位置で[s^h]となるということですから、音韻観念は{s^h}ではないのでしょうか。アクセントの有る位置で音韻観念{s^h}は完全に実現して[s^h]となり、アクセントの無い位置で{s^h}は不完全に実現して[s]となった、と理解することができます。

安井教授：対立の無い複数の音声について、いずれを音韻観念として設定するか、難しい問題です。有坂秀世によると、“丁寧”に発音したばあい、音韻観念が実現するというのですが、調査報告から、丁寧な発音と、そうでない発音を読み取るのは困難です。また、過去の音については、話者に確認することはできません。さまざまな情報によって、実在した音韻観念はコレコレに違いない、と想定することになります。

山村健一：前回、有坂秀世^{ありさかひでよ}氏の『音韻論』を確認した時に、強音の有る位置で音韻観念^{おんいんかんねん}は比較的完全に実現されるけれども、強音の無い位置では不完全に実現される、ということでした。そうであるならば、アクセントが有る位置で実現される[sʰ]を音韻観念{sʰ}として良いのではないのでしょうか。

安井教授：そうですね。とりあえず有力な情報によって音韻観念を設定しておいて、その後、なにか不都合なことが起きたならば、その時点で再度検討するということがでいかがでしょうか。

それで、語頭やアクセントの有る位置で[sʰ]であることは、有力な情報ですので、これにより音韻観念を{sʰ}としておく、ということがいかがでしょう。

山村健一、佐藤久美：それでいいと思います。

.....

佐藤久美：ところで、今回は時代をさかのぼって清代の満州語口語や文語^{ぶんご}を確認しましょう、ということでしたね。

山村健一：過去の満州語口語の資料には、どのようなものがありますか。

佐藤久美：『寧古塔紀略』^{ねいことうきりやく}（1721年。著者は漢人）が有名です。

《『寧古塔紀略』の背景》

安井教授：『寧古塔紀略』については、竹越孝^{たけこしたかし}氏が、「『寧古塔紀略』に見られる漢字音写満洲語語彙」（1998年）により、詳細な書誌と語彙対照表および興味深い考察を公にしています。それによると、同書の著者吳振臣^{ごしんしん}は、父吳兆騫^{ごちやうけん}の流刑地である寧古塔^{ねいことう}（黒龍江寧安県）で生まれ（1664年）、18年後に、父の故郷江蘇^{こくろりゅうこうねいあん}吳江^{ごとうき}に帰郷し（1681年）、その後、六十歳の頃（康熙六十年（1721））、寧古塔での生活を回想して綴った『寧古塔紀略』を公にしたということです。その著書の中に、漢字で音訳した満州語がでてきます。

山村健一：著者の吳振臣は、どのような言葉の環境で育ったのでしょうか。

安井教授：同論文は、父の兆騫が故郷の母親に子振臣の様子を知らせた書信を紹介しています。それによると、吳江の漢語方言を話し、漢語の官話（役人の言葉）や満州語を習得していく様子をうかがうことができます。

山村健一：吳振臣の満州語はどの程度のものだったのでしょうか。バイリンガルだったのでしょうか。

安井教授：その点、よくわからないのですが、同論文によると、父親の吳兆騫は同じ境遇の文人たちと詩社を結成するなどしたようです。漢人の社会があり、子の振臣も当地の漢人社会の中で育ったと想定していいのではないのでしょうか。

なお、『寧古塔紀略』によると、寧古塔は内城と外城からなり、漢人は外城の東西の二門の外に住んでおり、吳振臣の家は東門の外にあったが、その後、

漢人は皆城中に移され、呉家は西門の内側に移ったとあります¹。この記述からも漢人が集まって暮らしていた地域が存在したことがわかります。

山村健一：呉振臣は、漢人社会で育ち、第一言語は中国語で、満州語もできる、という状況でしょうか。

佐藤久美：そうしますと、『寧古塔紀略』にでてくる漢字で音訳した満州語は、中国人の立場で習い覚えた17世紀後半（1664～1681）の黒龍江寧安県あたりの満州語口語ということになりますね。

《『寧古塔紀略』のsの音質》

安井教授：竹越氏の論文は、『寧古塔紀略』にでてくる漢字音訳満州語の語彙95種をあげ、参考として対応する満州語文語、錫伯語（山本謙吾1969による²）などを付します³。なお、満州語は「父曰阿馬，母曰葛娘」（父は阿馬と言ひ、母は葛娘と言ふ。）のように、漢字音によって訳されています。

佐藤久美：何かおもしろいところはあるのでしょうか。

安井教授：これは竹越氏が指摘したのですが、漢字音訳満州語と、満州語文語や錫伯語を対応させると、漢字音訳満州語の有気の破擦音に、満州語文語や錫伯語のsが対応する部分があります。

佐藤久美：『寧古塔紀略』の満州語の音は、有気の破擦音であった、ということでしょうか。

安井教授：さあ、どうでしょう。まずは、満州語文語の文字sと錫伯語音sに対応する語をあげてみましょう。いま、錫伯語の音声[]は山本謙吾（1969）により追加します。

漢語	漢字音訳満州語	文語	錫伯語
9. 女	又而漢濟	sargan jui	sahənji[sakəndʒ]
12. 妻	又而漢	sargan	sarəhən[sarkən]
20. 小廝	哈哈朱子	haha juse	hahə[xax]・jusə[dzʊs]
21. 丫頭	又而漢朱子	sargan juse	sarəhən[sarkən]・jusə[dzʊs]
22. 好	山音	sain	sian , sian[ʃen, sæn]
35. 金	愛星	aisin	'a'isɪn[ʔaɪʃm]
69. 五	孫查	sunja	sunjaa[sundʒa]

1 「周八里，共四門，南門臨江，漢人各居東西兩門之外。予家在東門外，……。後因吳三桂造逆，調兵一空，令漢人俱徙入城中，予家因移住西門內。」（姜維公、劉立強（2014）『東北辺疆卷 八 柳辺紀略 龍沙紀略 寧古塔紀略』中国辺疆研究文庫，哈爾濱：黒龍江教育出版社）。

2 山本謙吾（1969）『満洲語口語基礎語彙集』，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

3 他に女真訳語（乙種本。明代初期）、女真訳語（丙種本。明代末期）、韃靼漂流記、愁州謫録の満州語を付します。

78. 貂皮	色克	seke	—
80. 調羹	差非	saifi	—
81. 箸	叉不哈	sabka	safəqə[safq]
88. (動物名)	哈什馬	hasima	—
94. 歌舞	莽式	maksin	mahəsin[maɣʃɪn], maqəsin[maqʃɪn]
95. 善誦者	叉馬	saman	saməN[samən]

山村健一：たしかに、語頭の位置で、満州語文語と錫伯語の s に、有気の破擦音の漢字「叉」「差」（現代北京語は[tʂʰ-]）が対応していますね。

9. 女	叉而漢濟	sargan jui	sahənji[sakəndʒ]
12. 妻	叉而漢	sargan	sarəhən[sarvən]
21. 丫頭	叉而漢朱子	sargan juse	sarəhən[sarvən]・jusə[dzʊs]
81. 箸	叉不哈	sabka	safəqə[safq]
95. 善誦者	叉馬	saman	saməN[samən]
80. 調羹	差非	saifi	—

9,12,21, 81,95 をみると、満州語文語と錫伯語で sa とあるところ、『寧古塔紀略』の満州語の音訳漢字は「叉」です。この叉の現代の北京語音は[tʂʰa]であり、当時も、何らかの有気の破擦音であったはずですから、摩擦音 sa と合いません。

80 をみると、満州語文語で sai とあるところ、『寧古塔紀略』の満州語の音訳漢字は「差」です。この差の現代の北京語音は [tʂʰai]であり、当時も、何らかの有気の破擦音であったはずですから、sai と合いません。

安井教授：その点について、竹越氏は二つの論文を紹介します。

- ①現代満州語の方言調査に、本来借用語にしか現れない[tʂʰ]が、固有語にも[s]の自由変異として現れるとする報告がある⁴。
- ②また別の現代満州語の方言調査に、語頭の s が明瞭な息を伴って発音され([sʰ])、満族の老人が漢語を話す時には、[sʰ]をもって漢語の[tʂʰ]に代替する傾向にあるとする報告がある⁵。

以上二点を紹介するとともに、叉[tʂʰ-]や差[tʂʰ-]は、^{こしんしん}呉振臣の漢語では^{けんぜつおん}捲舌音ではなく、[tsʰ-]であった可能性があることを指摘し、文語などの s を叉差[tsʰ-]で表

⁴ 趙傑 (1989) 『現代満語研究』北京：民族出版社。^{こくりゅうこうしやうたいらいけんたいこうそん}黒龍江省泰来県大興村の満州語口語の調査報告。例としては、「靴」が文語で sabu のところ口語で [tsʰəwo] となり、「大根」が文語で mursa のところ口語で [məltʂʰa] となるなど。

⁵ 馬学良、烏拉熙春 (1993) 「満語支語言中の送氣清擦音」『民族語文』1993-6 : 4-9,37。

記するのは、①や②と関係があるとします。

山村健一：『寧古塔紀略』の満州語では、語頭において s は[ts^h]となる場合があったということでしょうか。

安井教授：それはどうでしょうか。①は、漢語の音韻{ts-}{ts^h-}を、満州語の固有語に取り入れた状況です。このような状況は、漢語と満州語のバイリンガル話者が相当に増加し、それにもなつて、満州語の固有語を[ts-][ts^h-]をもって発音する状況も増加し、それを聞いた小児が満州語のなかに、音韻観念{ts^h}{ts}を取り入れたときに、起こるのではないのでしょうか。17世紀後半(1664~1681)という時代をかんがえると、満州人が固有語を{ts^h}をもって発音するのは、少々無理があるかもしれません。

佐藤久美：そうしますと、②に関わる何かがあった、ということでしょうか。

安井教授：はい、そう思います。満州人は、語頭の s を、{s^h}のつもりで発音した。それを、漢人は、漢語の{ts^h}として聞き取り、“又差”{ts^h}で表記した、というところでしょう。

佐藤久美：現代の満州語口語だけでなく、17世紀後半(1664~1681)の満州語口語にも{s^h}が有ったということですね。そうしますと、満州語文語にも、その痕跡を見つけることができるかもしれませんね。

安井教授：なにか見つかる、おもしろいのですが。

《『寧古塔紀略』の二項対立子音》

山村健一：ところで、『寧古塔紀略』の満州語の破裂音と破擦音における二項対立子音は、どのような状況と考えたらいいのでしょうか。

安井教授：『寧古塔紀略』の漢字音訳満州語と、満州語文語や錫伯語を対応させると、二項対立子音の様子が見えてきます。それによると、文語や錫伯語の b, d, g, j に、音訳漢字の無声無気音を当て、文語や錫伯語の p, t, k, c に音訳漢字の無声有気音を当てます。一部例外もありますが、ほぼ綺麗に対応します。

『寧古塔紀略』の満州語	呉振臣の漢語(捲舌音は無いことにする)
■ b, d, g, j	← 無声無気音の p, t, k, tɕ, ts
■ p, t, k, c	← 無声有気音の p ^h , t ^h , k ^h , tɕ ^h , ts ^h

佐藤久美：これを、どのような状況の反映、と考えたらいいのでしょうか。

安井教授：もしも、満州語が、気音の有無ではなく、強音と弱音もしくは無声音と有声音で対立していたならば、対応に“ばらつき”が出るはずですが。

山村健一：綺麗に対応するということは、『寧古塔紀略』の満州語は、現代満州語口語と同様に、気音の有無で対立していた、と考えて良いのではないのでしょうか。

安井教授：そのあたりが穏当なところでしょうね。つぎは、満州語文語です。

《満州語文語の背景》

山村健一：佐藤さんは、満州語文語の講義にでていますね。満州語文語には、二種類あるとのことですが、どういうことでしょうか。

佐藤久美：満州語文語を表記する文字に二種類ある、ということです。無圏点満州文字と有圏点満州文字です。

山村健一：「ムケンテン」と「ユウケンテン」・・・ですか。

佐藤久美：1599年（明・神宗の萬歴27年。これは清の太祖が後金を建国し年号を天命とする17年前のこと）、後に清の太祖となるヌルハチ（努爾哈赤）は、大臣のエルデニ（額爾德尼）とガガイ（噶蓋）に命じて、モンゴル語を表記するモンゴル文字（ウイグル式モンゴル文字。表音文字）を用いて、満州語を表記させました。この時期の文字を無圏点満州文字といいます。

その後1632年（明・毅宗の崇禎5年。清・太宗の天聰6年）に、清・太宗のホンタイジ（皇太極）の文字改革の命をうけ、ダハイ（達海）という人物が、これまでの無圏点満州文字に丸（圏という）や点を加えて、発音の違いを明瞭に表すことができるようにしました。また借用語を表記するために、新たな文字を作りました。これを有圏点満州文字といいます⁶。

安井教授：無圏点満州文字の実物は簡単には手にとれないのですが、この研究室に貨幣の実物資料があります。



佐藤久美：これは、清の太祖ヌルハチが天命年間（1616-1626）に発行した貨幣ですね。

山村健一：なんて書いてあるのでしょうか。

佐藤久美：縦書きです。左に abkai（天の）、右に fulingga（命をもつ）、上に han（王）、

⁶ 金啓琮（1981）『滿族的歴史與生活 —三家子屯調査報告』45-56、哈爾濱：黒龍江人民出版社、池上二良（1994）「満州語文語の正書法の沿革—特に o, u, ū について—」『東方学』88：100-110 を参照。

下に *jihā* (錢) とあります。これは“天命汗錢”などと呼ばれる銅錢です。

安井教授：有圈点満州文字にはいろいろな資料があります。何をお見せしてもいいのですが、同じく貨幣ということでしたら、このような銀錢があります。



佐藤久美：山村君、どうでしょう。点と丸ですが、確認できますか。左から右に、*gehungge* (明亮なる)、*yoso-i* (原則の)、*ilaci* (第三の)、*aniya* (年) とあります。合わせて「宣統三年」(1911) となります。

山村健一：縦に、左から右に綴るところは、モンゴル文字と同じですね。ところで、点と丸はどんな働きをするのですか。

佐藤久美：詳しいことは省きますが、無圈点満州文字には、*k* と *h* の区別がありません。そこで、後者に小さな“圈” (丸) を付けて区別します。*k* と *g*、*t* と *d*、*a* と *e*、*o* と *u* などの区別もありません。そこで、後者に“点”を付けて区別します。

山村健一：なるほど、表記が精密になっているのですね。ところで、借用語を表記するために、新たに文字を作ったということですが、どのようなものですか。

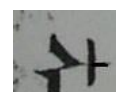
佐藤久美：漢語の *ts-* *ts^h-*を表記するために、満州文字 *s* に縦線を加えて文字 *ts* を作り、さらに文字 *ts* に横線を加えて文字 *ts^h* を作りました⁷。



文字 *s*



文字 *ts*



文字 *ts^h*

山村健一：一つ質問があります。佐藤さんの言うように、文字 *s* → 文字 *ts* → 文字 *ts^h* の順番で作られたとしたら、契丹小字と同じ順番です⁸。そうであるならば、とても面白いと思うのですが、満州文字の場合、どうして順番がわかるのですか。

佐藤久美：『滿漢字清文啓蒙』(1730年)という満州語の学習書の巻一に、文字 *ts^h* の書き順

⁷ 挙例の文字は『滿漢字清文啓蒙』(1730年)の一本による。

⁸ はじめ契丹小字 𐰞 で漢語音 *s-*、*ts^h-*、*ts-*を表記し、次に契丹小字 𐰞 から 𐰞 を作り *ts-*を併記し、最後に 𐰞 を作り *ts^h-*を併記しました。

が出ていて、文字 s → 文字 ts → 文字 ts^hの順に筆画を加えます。それによりました。でも、書き順と、文字作製の順番は、別のことですね。軽率でした。作製の順番はわからない、と言うべきでした。

山村健一：いや、まってください。字画を加えて文字を作っていくのは自然なことです。文字 ts よりも、文字 ts^hのほうが1画多いわけですから、最初に文字 ts を作り、それに1画を加えて文字 ts^hを作った、というのは納得できることです。そのような文字作製の順序が、文字 ts^hの筆順に反映しているとみても、それほど変なことではないとおもいます。

安井教授：文字 ts、文字 ts^hが、どのように作られ、使用されたかという問題は、これまで話し合ってきたことと直接関係するところです。どのような情報でも知らせてください。文字作製の順番については後で取りあげましょう。

それでは、佐藤さん、無圈点満州文字から説明をお願いします。

《無圈点満州文字の漢語音 ts- ts^h- s-の表記》

佐藤久美：無圈点満州文字の資料には『清太祖朝老満文原档（第一冊）』⁹があります。これは、無圈点満州文をローマ字に転写し、漢訳を付したものです¹⁰。その中に出てくる借用漢語のうち、ts- ts^h- s-をもつ語彙を挙げると次のようになります。先週、安井先生に言われて調べておきました。数字は掲載ページ数です。同じ語彙が重複して現れる場合は、最初の語彙のページ数のみを出しました。

■漢語音 ts-

ja-se (寨子) 1	子 ts-	← 満州文字 s
guwei-se (櫃子) 76	子 ts-	← 満州文字 s
leo-se (樓子) 97	子 ts-	← 満州文字 s
tang-se (堂子) 101	子 ts-	← 満州文字 s
sui (罪) 9	罪 ts-	← 満州文字 s
can-sun (千總) 87	總 ts-	← 満州文字 s
be-sun (百總) 87	總 ts-	← 満州文字 s
sung-bing-guwan (總兵官) 38	總 ts-	← 満州文字 s

■漢語音 ts^h-

san-jan (參將) 9	參 ts ^h -	← 満州文字 s
----------------	---------------------	----------

⁹ 廣禄、李学訳注 (1970)『中央研究院歴史語言研究所專刊之五十八 清太祖朝老満文原档(第一冊)』, 台湾: 中央研究院歴史語言研究所。

¹⁰ 無圈点満州文字はkとg、tとd、aとe、oとuなどを区別しないが、有圈点満州文字は区別する。有圈点文字の区別を勘案し、メレンドルフ式のローマ字転写によって表記したものとなっている。Möllendorff, P. G. von (1892) *A Manchu Grammar, with Analyzed Text*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.

■漢語音 s-

su-jo (蘇州) 85

蘇 s- ← 満州文字 s

山村健一：漢語音 ts- ts^h-s-は、すべて満州文字 s で、表記しています。そうすると、満州人は、漢語の破擦音 ts- ts^h-を、摩擦音 s で発音した、ということですか。

佐藤久美：それは文字からは言えません。そもそも、無圏点満州文字が拠ったモンゴル文字に破擦音 ts- ts^h-を表記する文字はありません。摩擦音 s を表記する文字 s はあります。ですから、そのモンゴル文字に拠った無圏点満州文字にも摩擦音 s を表記する文字 s しかありません。

山村健一：文字 s で、漢語音 ts- ts^h-を表記するのは、そのようにするしかなかったということですね。そうしますと、“仮に”当時の満州語の固有語に ts- ts^h-という発音があったとしても、無圏点満州文字で表記する術はなかった、ということになります。

佐藤久美：そういうことになります。もっとも、文字 j や文字 c を利用してもよかったです、そのようにはなっていません。

安井教授：無圏点満州文字は、モンゴル語文の文字 s の用法に倣ったということですが、モンゴル語文でどうなっているか確認しておきましょう。

いま、亦鄰真 (1987) より、元代のモンゴル語文中の漢語借用語を挙げると次のようになります¹¹。

■漢語音 ts-

sinksi (曾子の、曾と子)、sank (藏、匠)、si (紫、資、集)、
sink (贈)、soo (左)、sonk (總)

■漢語音 ts^h-

sank (倉)、sam (參、僉)、san (錢)、si (齊)、sin (秦)、
sink (青、清)、soin (全)

安井教授：たしかに、文字 s で漢語音 ts- ts^h-が表記されています。この表記法により、漢語音 ts- ts^h-を、モンゴル語音 s で発音したとする研究者もおられますが、そのように主張するためには別の手続きが必要でしょう。無圏点満州文字はこのような表記法に倣ったわけですね。

山村健一：無圏点満州文字は、二項対立子音を区別せず、漢語音 ts- ts^h-の表記もモンゴル文字に倣ったとすると、満州語の音韻観念を知る情報は乏しいですね。

¹¹ もと (1987) 『元朝秘史・畏吾体蒙古文復原』、内蒙古大学出版社。亦鄰真 (2001) 『亦鄰真蒙古学文集』 713-746、呼和浩特：内蒙古人民出版社による。

安井教授：そうですね。

《有圈点満州文字の漢語音 ts- ts^h- s-の表記》

山村健一：有圈点満州文字は1632年に、ダハイ（達海）が従来の無圈点満州文字に丸（圈という）や点を加えて発音の区別をした。また、新たな文字も作ったということでした。新たに文字を作ったり、運用法を変えたりする場合、そこに当事者の音韻観念が反映するばあいがあります。

佐藤久美：まず、わざわざ言う必要はないかもしれませんが、満州語文語の固有の言葉に、s-は有ったが、ts- ts^h-に相当する発音は無かった、ということが明確にわかります。

山村健一：どうしてわかるのですか。

佐藤久美：漢語音 ts, ts^hを表記するために、新たに文字 ts, ts^hを作りました。もしも、満州語の固有語に発音 ts, ts^hがあったならば、それを文字 ts, ts^hで表記する例があってもよいのですが、そのようなことはなく、文字 ts, ts^hで表記したのは、漢語からの借用語だけです。

山村健一：具体的にはどのようなものですか。

佐藤久美：福田昆之編『満洲語文語辞典』（横浜：FLL, 1987年）からいくつか例を挙げます¹²。

■漢語音 ts-

tsai-siyang（宰相）	宰 ts-	← 文字 ts
fei-tsoo（肥皂「せっけん」）	皂 ts-	← 文字 ts
sui-erun（罪刑）	罪 ts-	← 文字 s

*suiは漢語“罪 tsui”の音訳。erunは満州語で刑。

■漢語音 ts^h-

ts ^h an-jeng（参政）	参 ts ^h -	← 文字 ts ^h
ts ^h ui-ilha（翠面花）	翠 ts ^h -	← 文字 ts ^h
deng-ts ^h oo（灯草「灯芯草」）	草 ts ^h -	← 文字 ts ^h
sui-cecike（翠雀「カワセミ」）	翠 ts ^h -	← 文字 s

*suiは漢語“翠 ts^hui”の音訳。cecikeは満州語文語で雀。

■漢語音 s-

sung gurun（宋国）	宋 s-	← 文字 s
----------------	------	--------

¹² この辞典のローマ字表記では、漢語借用語音 ts-を z で表記し、漢語借用語音 ts^h-を zh で表記する。ここでは、混乱をさけるために、前者を文字 ts、後者を文字 ts^hと書き直して提示し、理解の便宜のため音節の切れ目にハイフンを付す。

*gurun は満州語文語で国。

fu-sa (菩薩)	薩 s-	← 文字 s
sui-gung (歳貢「貢物」)	歳 s-	← 文字 s

安井教授：辞典にはいろいろな時代の満州語と、いろいろな質（小説から公文書まで）の満州語が混在しています。調査の対象にはしにくいのですが、使い方によっては面白い資料となります。なにせ、満州語文語で起りえるほぼ全ての例が含まれているわけですからね。

佐藤久美：借用漢語の sui-erun（罪刑）の罪 ts-や、sui-cecike（翠雀「カワセミ」）の翠 ts^h-は、文字 s で書かれています。

山村健一：文字 ts,ts^h で表記できるにもかかわらず、文字 s で表記するわけですから、この場合、漢語音 ts- ts^h-は、満州語風に訛って、摩擦音 s で発音されたのでしょうか。

佐藤久美：他方の、tsai-siyang（宰相）などの借用漢語や、ts^hui-ilha（翠面花）などの借用漢語を含んだ語彙は、文字 ts や ts^h で書かれているわけですから、ts や ts^h の音で発音されたと理解して良いのでしょうかね。

山村健一：それはどうでしょうか。ちゃんと漢語風に発音できた人と、満州語なまりで s と発音した人など、さまざまではないでしょうか。

場合によっては、新たに作られた満州文字 ts,ts^h の使命は、“文章の上”で借用漢語を精密に表記することであって、“発音は二の次”であったかもしれません。

安井教授：漢語を話す時は漢語音 ts- ts^h-を正しく発音できる満州人も、漢語から満州語にスイッチしたときに、固有語のなかに混じった借用語について、固有語に無い音 ts, ts^h をもって発音することは、それほど容易なことではないかもしれません。清朝の初期の頃は、あんがい山村君の言うような状況であったかもしれませんね。

《有圈点満州文字の新文字 ts- ts^h-》

山村健一：満州文字 ts,ts^h を、満州文字 s を変形して新たに作ったということですが、この点について、何かおもしろいことはありませんか。

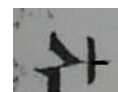
佐藤久美：無圈点満州文字から有圈点満州文字を作るときに、借用漢語音の ts-, ts^h-を表記するため、文字 s に筆画を加えて文字 ts-, ts^h-を作り、借用漢語音の ts-, ts^h-,s-は次のような異なる文字で表記されるようになったことは先に紹介しました。



文字 s

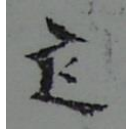


文字 ts

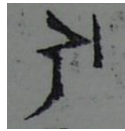


文字 ts^h

それで、この文字を含む“四 si”“子 tsi”“慈 tsh^hi”という借用漢語音を表記するためにも、新たな文字が作られました。この母音 i は、満州語には無いもので、耳慣れない響きだったのでしょう。



文字 si

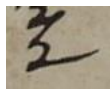


文字 tsi 又は ts



文字 tsh^hi

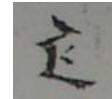
安井教授：なかむらまさゆき中村雅之氏の「漢語音「zi/ci/si」を表す満洲文字」（2008）¹³によりますと、“四”や“子”などは、初期の満文資料（無圏点満州文字資料）で se と表記されたが、ダハイが文字を作る際に、母音文字 e の中央右に、一画加えて新たな文字を作ったとします。いま、この説にそって、例字を並べてみました。



①無圏点の文字 se



②有圏点の文字 se



③有圏点の文字 si

佐藤久美：①の無圏点文字（手書きの資料）は sa と se を表します。se を表記するため有圏点文字では点を一つ付けます。それが②です。②に更に一点付けて漢語音 si を表記したものが③ということになりますね。

山村健一：問題は、文字 tsi（又は ts）と、文字 si, tsh^hi の母音に相当する部分の表記が違うのはなぜか、ということですね。

佐藤久美：先に挙げた無圏点満州文字の資料では、ja-se（寨子）のように、子 tsi は se と表記します。また、『満洲語文語辞典』には、se-lii hafan（司理官）のように、司 si を se と表記する例があります。漢語音 tsh^hi を表記する例はまだ見つけていませんが、無圏点満州文字では、漢語音 tsi, tsh^hi, si を、文字 se で表記したのではないのでしょうか。

それで、無圏点文字の se に改良を加える時に、何らかの理由があって、異なる表記になったのでしょうか。ふつうに考えるならば、漢語音 tsi の無圏点文字 se に基づいて、それに改良を加えて作ると思うのですが。

漢語音	無圏点文字	有圏点文字
tsi	se	?
tsh ^h i	se	e に加点

¹³ 中村雅之（2008）「漢語音「zi/ci/si」を表す満洲文字」『KOTONOHA』65:1-4.

si

se

e に加

安井教授：この整合性を欠く表記については、いくつかの考え方があられるようです¹⁴。そのうち、池上二良氏の「満洲字 dz について」（1947）が時期的に早いので、考え方の出発点として確認します¹⁵。

それによりますと、si（四など）は、満洲語にある音節末子音[s]と、漢語音[si]との比較によって、母音[i]を聞き取ることができた。ts^hi（慈など）は、母音[i]が有気音 ts^h-の後にあるため、やはり聞き取ることができた。tsi（子など）は、母音[i]が無気音 ts-の後にあるので判別が困難であり、全体を一つの子音とみて一字で写した¹⁶。（趣意）

山村健一：漢語音 si, ts^hi と、漢語音 tsi の母音 i の聞こえが、前に接する子音の違いによって異なった、という考え方ですね。しかし、無気音 ts-の後で母音の i が判別し難かったという点については、すぐには納得できません。

佐藤久美：漢語音 tsi のばあい、そのほとんどの例は、語末の“子”の例なのですが、そのことと、なにか関係はないでしょうか。『満洲語文語辞典』から少し例をあげてみます。

tsan-se（搽子）

tsung-se（粽子）

bin-tsi(ts)（櫛子「餅菓子」）

fen- tsi(ts)（分子「分け前」）

fu- tsi(ts)（夫子「孔子」）





boo-se 又は boo- tsi(ts)（包子）

fang-se 又は fang- tsi(ts)（方子「処方箋」）




gioi-se 又は gioi- tsi(ts)（橘子）

ping-se 又は ping- tsi(ts)（秤子）

山村健一：なるほど。先に確認した無圈点の『清太祖朝老滿文原档』の借用漢語音 tsi の例

¹⁴ 中村雅之（2008）は、 は dz+i であるとし、 dzi が先に作られ、次いで  と  が作られたため、整合性のない表記が生まれたとする。後者については sè と tsè という翻字を提案する。

¹⁵ 池上二良（1999）『満洲語研究』213-215，東京：汲古書院による。

¹⁶ 「満洲人が、ssü, tz'ü, tzü を写すそれらの字をつくつたとき、ssü では[s]とつぎの母音（成音節的な有気音か）の結合は満洲語の音節末や語末の[s]から聞き分けられ、あとのその音も聞きとることができて  の字で写し、また tz'ü では有気音のあとにあるので、その音も聞きとることができて  の字で写したが、tzü では無気音のあとにあるその音が判別し難く全体を一つの子音とみて  の一字で写したといふことはないだらうか。」

も「～子」のみでした。ところで、「子」は接尾辞として語末に常用され、現在では軽く読まれ（軽声）ます。軽声となることで母音の持続時間が短くなり、母音はほとんど聞こえません。当時も軽声であり、母音はほとんど聞こえなかったとしたら、文字 *ts* のみで表記するのではないのでしょうか。

それで、借用漢語音 *tsi* については、“そのほとんど”が軽声で発音される「～子」であったため、子音だけの表記 *ts* を採用した。その結果、文字 *si*、文字 *ts*、文字 *ts^h* のように、整合性を欠く表記となってしまった。

佐藤久美：そうしますと、有気音の *s*-, *ts^h* と、無気音の *ts* の違いに注目するというこれまでの議論の参考にはならない、ということですね。

山村健一：そうですね。文字 *si*、文字 *ts*、文字 *ts^h* については参考にならないかもしれません。

しかし、佐藤さんは、文字の書き順の観点から、文字 *s* → 文字 *ts* → 文字 *ts^h* の順番で作られた、としました。この点については参考になりそうです。漢語音 *s*-, *ts*-, *ts^h*- を文字 *s* で表記する段階があり、次に漢語音 *ts*- を析出し、それを表記するために文字 *ts* を作った。最後に漢語音 *s*-, *ts^h*- から *ts^h*- を析出し、それを表記するために文字 *ts^h* を作った。

これは、契丹小字で漢語音の *s*-, *ts*-, *ts^h*- を **𐰺** で表記し、次いで *ts*- 析出して **𐰽** で表記し、最後に *ts^h*- を析出して **𐰾** で表記した、という表記の精密化の過程とおなじです。

安井教授：そのことについては、中村氏が先の論文（2008年）で、やや異なる観点から、借用漢語音 *s*-, *ts*-, *ts^h*- の区別の仕方について、吉池孝一（2003）¹⁷ を挙げ契丹小字の仕方を確認し、満州文字との類似点を指摘しています¹⁸。

借用漢語音 *s*-, *ts*-, *ts^h*- の区別の仕方と、モンゴル語やツングース語の *s* の音質は切り離せない関係にあるはずです。そのことを明らかにすることによって、古アルタイ語の、一部の言語ではありますが、破裂音と破擦音における二項対立子音の弁別特徴が明らかになるかもしれません。

いずれにしても、今回の勉強会で、現代の満州語口語だけでなく、17世紀後半（1664～1681）の満州語口語にも *{s^h}* が有った（らしい）ということがわかったことは収穫でした。これで、時代をさらに遡った女真語にも *{s^h}* が認められる可能性がでてきたわけです。

今日はこのくらいにしておきましょう。次回は女真文字に入ります。

¹⁷ 吉池孝一（2003）「漢語の精母系子音を表わす契丹子小字について」『KOTONOHA』13：18-21。

¹⁸ 「いま、問題にしている満洲文字と同様に、有気音と摩擦音を同様に扱い、無気音と区別する段階があった。モンゴル語やツングース語の立場から漢語音をとらえると、*[ts][tsʰ][s]* の三音を区別する際には、まず無気音の *[ts]* が最も析出しやすかったのであろう。」（2頁）とします。